

私たち人間の心の中に浮かび上がる最も重要な問い、それは「人生の究極的な目的は何か？」であるに違いありません。この問いにイエスは明白に答えておられます。「あなたは地の塩、世の光である。」

私たちはイエスによって地の塩として、世の光として召し出されている。そう確信し、告白する私たちにとって、イエスはどのような存在なのでしょう。

イエスは私たちが常に歩むべき‘道’です。

聖書に登場するイエスに魂を捉えられた人々の何人かを思い出してみましよう。

彼らはすべて人生の途上であって、にっちもさっちもいなくなつた人たちです。ガリラヤ湖^①の漁師達は、魚がとれなければその日は絶食を余儀なくされました。収税人は一人の友達もいませんでした。一人の女性は、不倫の場に踏み込まれて、もう少しで村の広場で石打ちの刑に処せられるところでした。一人の足腰の立たな男性は、ベセスダの池のほとりで18年間も呻吟していたのです。

この人々にイエスは歩み寄りませす。彼は倒れている人を抱き起こし、死刑にされそうになった女性を赦し、収税人の友達になりました。イエスは彼ら一人一人に希望を与え、人間としての尊厳を取り戻させたのです。その意味で、イエスは彼らの前に開かれた道でした。

今日イエスは私たちの歩むべき道として私たちの前にそそり立たれます。弱つた人に力を与え、驚のように翼を張って上ることを可能にされます。イエスの道を歩むこと、これが地の塩として生き、世の光として存在することです。

道としてのイエスは、同時に清々しい神のそよ風でもあります。

キリスト者の人生はパラ色の人生ではありません。パウロ、ペテロ、マルチン・ルーサー・キング牧師、マザー・テレサ、賀川豊彦を見ればそれは明らかです。

脅迫、迫害、死に直面しつつも、彼らはイエスの平安という風を背中に受けることによって生き返り、人間らしく生き生きと生きることができたのです。彼らにとって、イエスはいかなるこの世の力も打ち消すことのできない安らぎをもたらしたのです。

イエスは私たちにとっても神のそよ風です。イエスの風を背中に受けてこそ、私たちはこの愛の欠落した世界に身を置きながら、他者に慈しみの眼差しを向けることができるのです。自己の正しさを声高に主張する風潮の直中に生きながら、悔い改めることができるのです。イエスの風に背中を押されて生きる、これが地の塩、世の光として生きることであります。

しかしそれだけではありません。詩編の詩人は記しています。「神の義は朝空に上る太陽。冷えきつた暗い野原に暖かさをもたらす力。」私たちクリスチャンにとって、イエスこそ神の義の体現、朝空に上る太陽です。

私たちは 太陽であるイエスがまぶしくて、思わず顔を背けてしまうことがあります。

例えば教会外の価値観を教会内に持ち込んでしまう時がそれです。他者の人格を傷つける行為に対して、無関心になってしまう時がそれです。丁度一滴のインクがバケツの水の中に落ちると影も形もなくなってしまうように、教会の外の価値観が教会の中に持ち込まれる時、その瞬間に教会は神の義に生きる者というアイデンティティーを喪失してしまうのです。

しかし、イエスはそのような私たちを放っておかれませす。私たちを、眠りから覚めよと揺り動かされます。神の義を仰ぎ見よと私たちの良心に語りかけて飽きることはありません。冷たく冷えきつた荒れ野を羊が草を食む牧場に変えてくださいます。その意味でイエスは朝空に上る太陽です。

この真実を心に刻んで生きる、これが地の塩、世の光として生きることであります。

イエスは太陽であると同時に、渴いた田畑をうるおす雨でもあります。詩編の詩人の言葉です。「神の恵みは渴ききつた田畑をしとしと潤す雨。」

私たちの魂が冷えきり、渴ききつた時、イエスは決して渴いたままにはされませす。見捨てられることはありません。イエスは私たちの魂に新しい命を吹き込まれます。

イエスによって新しくされ、潤され、常に生き直すこと、これこそ地の塩、世の光として生きることでありに違いありません。

イエスは道として私たちの前に現れます。朝風として私たちの前に現れます。輝く太陽として、そして田畑を潤す雨として現れます。

このイエスが私たちに「地の塩をして生きよ、世の光として生きよ」と呼びかけておられるのです。これ以上の恵みがあるのでしょうか。これ以上の喜びがあるのでしょうか。

ですから、信仰の同志である皆さん、「願わくは、あなたの前に歩むべき道が常に開かれるように。風があなたの背中を優しく押すように。太陽があなたの顔を暖かく照らすように。雨があなたの田畑をしと

しと潤すように。そしてまた会う日まで、願わくは慈しみの神が、あなたをしっかりとその御手の中に置き給い、あなたに平安を賜るように。」